

聞き手に対する話し手の心理的態度を表している。例文(2), (3)で示した「ようだ」や「ね」は話し手の心理的（主観的）態度を表すものとして「モダリティ（modality）」と呼ばれる。モダリティはさらに「命題に対するモダリティ」と「聞き手に対するモダリティ」の二つに分類されることがあるが、本研究での考察対象は韓国語の文末に生起する「聞き手に対するモダリティ」形式である。

(4) 철수가 달리고 있네.

Chelswu-ka talli-ko iss-*ney*.

人名-主格 走る-アスペクト-終結語尾

「チョルスが走っているね。」

(5) 철수가 달리고 있거든.

Chelswu-ka talli-ko iss-*ketun*.

人名-主格 走る-アスペクト-終結語尾

「チョルスが走っているの。」

(6) 철수가 달리고 있지.

Chelswu-ka talli-ko iss-*ci*.

人名-主格 走る-アスペクト-終結語尾

「チョルスが走っているだろ。」

例文(4), (5), (6)の下線で示した形態は、韓国語学において「終結語尾」と呼ばれ、終結語尾の中でも聞き手に対する敬意を表す ‘요’ (-yo) を付加することができる一群の形態を「半言体語尾」と呼んでいる。韓国語の半言体語尾の数は非常に多く、文を終結させる以外に待遇を表す機能や命題・聞き手に対する心理的態度を表す機能を持っている。本研究では半言体語尾のうち叙述形として使用される ‘-네(요) (-ney(yo))’、‘-거든(요) (-ketun(yo))’、‘-지(요) (-ci(yo))’ という三つの形態について考察する。

半言体語尾についてこれまで数多くの研究がなされてきた。しかしそのほとんどは内省や作例によるものであり、半言体語尾が会話で使用されるという特徴を有しているにも関わらず、一定量の会話データを用いて考察した研究はほとんど見当たらない。また、会話データを用いた研究であっても生起頻度を明示した研究はほとんどない。本研究では、まず一定量のデータを用いて各形態の意味・用法を明らかにする。

次に、韓国語の半言体語尾が有している機能と類似した機能を持っている日本語の終助詞との対照を試みる。韓国語と日本語は文法的に類似した言語であるとよく言われているが、両言語の述語構造を示した以下の例を参照されたい。

(7) 오늘은 날씨가 좋네요.

Onul-un nalssi-ka coh-ney-yo.

今日-題目 天気-主格 よい-終結語尾 略体上称

「今日は天気がいいですね。」

(8) Kyoo-wa tenki-ga ii-desu-ne.

今日-題目 天気-主格 よい-助動詞(丁寧)-終助詞

「今日は天気がいいですね。」

例文(7),(8)を見ると、語順や格助詞の存在、聞き手に対する敬意を表す形態の存在が類似点として挙げられる。しかし、文末に注目すると韓国語の場合は、半言体語尾で文を終結することも可能であるが、聞き手に対する敬意を表す ‘-요’ (-yo) が付加される場合には、半言体語尾が必ずその直前に現れる。それに対して、日本語は丁寧を表す助動詞「です」の直後に終助詞が現れるという相違点が見られる。半言体語尾と終助詞を対照することが可能であるという根拠は「統語的に文末、あるいは文末に近い位置に生起する」、「会話で使用されるという特徴を有する」、「話し手の心理的(主観的)態度を表すモダリティ形式である」という三点である。

2. ムード、モダリティの定義

ムード、モダリティは、テンスやアスペクトなどと比べて定義しにくいことが指摘されている。('Mood and modality are not so easily defined as tense and aspect.' (Bybee, Perkins, and Pagliuca 1994:176))。例えば亀井、河野、千野(1996)によると法(ムード)とは、動詞の示す行動を中心とする事態に対する、話し手の心の態度を表現する文法範疇であり、文法範疇の中でももっとも捉えにくい範疇であるとし、「ムードが動詞の文法範疇として明白に現れるのは印欧語であろう」(1996:1266)としている(下線は平による)。また、「同じ事態を述べるにしても、直裁的に言うこともあるし、また婉曲に言うこともあり、さらには、相手を説得するために、自分を強調することもあるし、相手に強く要請することもある。このように、相手に対して述べるべき事態についての話し手の気持ちを言語形式に表したものが広い意味での法(modality、法性、モダリティとも言う)である」(1996:1266)と定義している。しかし、ムード、モダリティは言語ごとに違った定義がされることが多く、また表現方法も異なるようである。例えば西洋言語学では、ムードは動詞の屈折形態によって表される文法範疇であり、直接法、命令法、仮定法などを区別するもの(Lyons 1977)と定義され、モダリティは主に法助動詞によって実現されるものと定義されている(Palmer 1986, 2001)。一方、日本語学においてはムードを「動詞類の屈折体系に関わる文法範疇の一つ」であり、屈折の体系を有する類型の言語にのみ有意味な概念である(益岡 1991)

という見解や「単語レベルの文法的=形態論的カテゴリー」とし、述語の語形変化（活用）によって実現されるものとする立場がある（宮崎 2000）。また、モダリティに関しては「言語の個別的、類型的なあり方に縛られない、一般性の高い概念」（益岡 1991）として捉えているものもあれば、「文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける文レベルの機能・意味的範疇」と規定し、「認識的叙法性（epistemic modality）」と「当為的叙法性（deontic modality）」に分類する見解も見られる（宮崎 2000）。このように西洋言語学での定義と日本語学での定義を見ただけでもムード、モダリティの定義は複雑であり、各言語によって異なることが分かる。では、韓国語学ではムード・モダリティをどのように定義しているのだろうか。

表1. 高永根（1986=1991）、李智涼（1990）、徐正洙（1996）、張京姫（1998）によるムード、モダリティの定義

	ムード	実現形式	モダリティ
高永根 (1986= 1991)	話し手の心理的態度と関連した意味領域が一定の動詞の活用形によって具現される文法範疇	先語末語尾によって表される	ムードによって現れる話し手の態度と関連する意味領域はもちろんのこと、名詞、副詞などの語彙範疇、語順の変換や語調などによって確認される意味領域
李智涼 (1990)	話し手の心理的態度と関連した意味領域が一定の動詞の活用形によって具現される文法範疇	先語末語尾によって表される (終結語尾によって表されるものをムードに含めることを否定)	(言及なし)
徐正洙 (1996)	文の内容について話し手が持つ精神的態度を表す文法範疇	終結語尾、先語末語尾によって表される	ムードに関わる用言の屈折形態や語尾、あるいは文末形態などによって表される 「認識的叙法」と「行為的叙法」に分類
張京姫 (1998)	通報的（伝達的）態度に該当	終結語尾によって表される	命題の事実性を話し手の主観的な認知的観点から表現する文法範疇

表1に示したように、高永根（1986=1991）、李智涼（1990）はムードを、話し手の心理的態度と関連した意味領域が一定の動詞の活用形によって具現される文法範疇と定義しており、韓国語では先語末語尾（‘-ㄹ-’(-keyss-)、‘-더-’(-te-)等）で表されるとしている。また、李智涼（1990）は終結語尾によって表されるものはムードから除外するべきであると提案している。一方で、張京姫（1998）はムードを終結語尾で実現するものとし、この点で高永根、李智涼とは全く異なった主

張をしている。李智涼が定義したように、先語末語尾によって表されるものだけをムードと定義することは、韓国語の形態・統語論的特徴に基づいた限定的なムードの定義と考えられる。

西洋言語学ではムードを‘直説法’、‘命令法’、‘仮定法’など動詞の屈折によって表される文法範疇であると定義されている。一方、韓国語ではそういった文の種類を決定する機能は、終結語尾が担っている。西洋言語学で文の種類を決定するものをムードと定義していることと、韓国語学で終結語尾が文の種類を決定する機能を持っていることを考慮すると、韓国語では先語末語尾で表されるものだけでなく、終結語尾によって表されるものもムードと定義した方がよいと考える。

本節では、西洋言語学と韓国語学のムード、モダリティの定義を踏まえて、ムードを「話し手の心理的態度が、終結語尾や先語末語尾などの一定の動詞の活用形によって表される文法範疇」とし、モダリティを「ムードに関わる用言の屈折形態や語尾、あるいは文末形態などによって表され、主に、文の命題内容や聞き手に対する話し手の心理的態度が表される意味領域」と定義する。

3. 語用論・談話研究と本研究との関連

本研究の考察対象である終結語尾は会話で使用され、話し手の心理的態度を表す形態であるためコンテクストを考慮した分析が必要不可欠である。さらに終結語尾はその数が非常に多く、叙述のみを表す形態だけでも23形態あることを한길 (1991) が示している。話し手はその数多い終結語尾の中から場面や状況に合わせて一つの形態を選択しなければならない。本研究では、話し手が一群の終結語尾の中から一つの形態を選択し、発話する際の「話し手の意図は何か」ということに関心を持っている。そのため、発話の場面や状況からその意味を探究する語用論という観点が非常に有用であると考えられる。

また、本研究ではこれまで行われてきた内省や作例に頼ったものではなく、シナリオの会話データを基にした考察を行っている。会話データというと自然会話を想像させるが、果たしてテレビドラマや映画のシナリオが言語現象を考察する上でのデータとなり得るのだろうか。熊谷 (2003) は「ドラマにはシナリオがあり、登場人物の発話はすべてセリフである。その意味で、ドラマにあらわれる会話のやりとりには、日常会話におけるような「自発性」や「即興性」がない」(2003: 7) とし、ドラマは日常生活と異なり、荒唐無稽な展開も少なくないことを主張した上で「ただし、ストーリーに現実離れした面があっても、そこにあらわれる発話もそうだとは限らない」(2003: 7) と述べ、ドラマと日常会話の類似性を指摘している。水原 (1999: 30) もまた「台詞の内容、長さ、言葉のリズム、その背景、どれから見ても、我々の日常生活に最も近いところで作られているのはテレビドラマである。これは演劇が駄目、映画がいけないというのではなく、そもそもテレビという媒体がそういうものなのである」とテレビドラマのシナリオの特徴を指摘している。

熊谷、水原の主張にもあるようにシナリオを使用した研究にも十分意義があると思われる。もち

ろん、テレビドラマや映画のシナリオを研究のデータとして用いるのに不都合な場合もあるだろう。例えば、発話の重なりや言いよどみなどの場合は、シナリオからは観察するのが難しいと思われる。しかし、本研究では、数多い終結語尾の中から、話し手は何を意図して一つの形態を選択して発話をするのか、またその形態を使用することで聞き手に何を伝えたいのか、その形態は会話を進める上で何らかの役割を果たしているのかを探ること、つまりその形態を用いることで話し手と聞き手の相互作用が如何にして行われるのかを考察することを目的としている。そのため、シナリオを用いた考察も十分に意義があると考えられる。また本研究では、テレビドラマだけでなく、映画のシナリオもデータとして扱っている。その理由は、終結語尾を考察する上で、セリフの長さは支障をきたさないと判断したこと、できるだけ多くのデータを用いて言語現象を考察することがより意義のあることと考えたためである。

4. 各形態の文脈的意味

本章では、韓国語の終結語尾のうち-네(요) (-ney(yo))、-거든(요) (-ketun(yo))、-지(요) (-ci(yo)) の文脈的意味を考察する。考察に使用した例文は、韓国のテレビドラマ・映画のシナリオをインターネット上からダウンロードし、テキストファイル化 (2.90MB) したものである。

4.1 -네(요) の文脈的意味

本節では、終結語尾-네(요) について、694例の用例を基に考察した。考察に当たって-네(요) と-겠네(요) に分類し、事態の主体別にとり得る品詞や非過去形、過去形との共起関係に着目して分析を行った。

まず、事態の主体が話し手で、無意志的な用言と共起した場合は発話時に起こった話し手の心的活動や内的状態を表すことが明らかとなった。動詞の過去形と共起した場合には、意志動詞、無意志動詞ともに共起可能であるが、話し手の意志とは無関係に起こった出来事や状態に気づいたことを表し、文脈的意味として「後悔」を表すこともある。また、形容詞の過去形と共起した場合は、過去に起こった感情や出来事を回想し、それを発話時に呼び戻して発話する場合にも使用されることが確認された。

事態の主体が聞き手や第三者である場合は、これまでの先行研究で特徴づけられてきた「現在知覚」したことや「認識した事実」を述べる際に使用され、文脈的意味として「感嘆」や「驚き」を表すという例が多かったが、この特徴づけによって説明し得ない用例も見受けられた。

次に、-겠네(요) について考察したが、主体が話し手で非過去形の意志動詞と共起し、話し手の意志を表す場合には、等称の-革として解釈できるのではないかという提案をした。

以上の考察をまとめると図1のようになる。図1を基に考えると、主体が話し手の場合は話し手

自身に起こった心的活動や内的状態を発話時に認識したことを述べるために-네(요)を使用し、主体が聞き手の場合には、聞き手に起こったことを主に「知覚」によって「認識」し、その発話状況により「感嘆」、「驚き」、「回想」、「後悔」、「非難」といった文脈的意味が現れる。

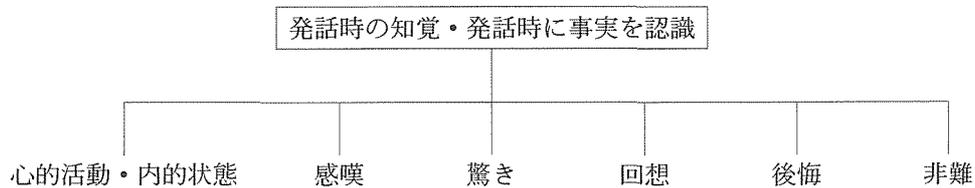


図1. -네(요)の用法と文脈的意味

以上の議論から一革(推)は、「話し手がある事態を発話時において認識したことを示す」形式であることを提案した。

4.2 -거든(요)の文脈的意味

本節では終結語尾-거든(요)について、269例の用例を基に考察を行った。考察に当たって事態の主体やとり得る品詞、そして非過去形、過去形との共起関係に着目して分析を行った。

事態の主体が話し手(146例)、第三者(120例)に比べて、聞き手(3例)が著しく少なかった。それは、-거든(요)が、聞き手が知らないと思われる情報を伝える際に使用されるという特徴を有しているためである。また、話し手が主体で、非過去形の動詞と共起する-거든(요)は、話し手の習慣や性質、能力などを表す場合にのみ使用されることが明らかとなった。そのため、これから行おうとしている出来事を述べる場合には義務を表す形式や推量を表す形式を用いて、話し手の中で既に決まっている事態として述べられる。また蓋然性接尾辞‘-ㄹ-’との共起例は一例しか見られなかった。それは‘-ㄹ-’が「事態に対する話し手の切迫した思いを表す」(野間 1988)という特徴を有するのに対して、-거든(요)は「話し手にとって事態が既に定まっていることを述べる」という特徴を有し、互いの機能が相反するためと考えられる。

次に、-거든(요)が発話のどの部分で使用されるかという考察を行った。その結果「質問に対する答えを述べる」場合、「話し手の一連の発話中、前の発話で使用される」場合、「話し手の一連の発話中、後の発話で使用される」場合の大きく三つの場合に使用されることが分かった。また、会話進行の観点から「話し手の一連の発話中、後の発話で使用される」場合には「直前の話し手の発話に情報を追加する」機能がある。さらに談話の初めに使用されたり、これまでの発話とは全く関連のない発話に使用された-거든(요)には「話し手が言いにくい要求をする際に直接的な表現を避け、聞き手に発話内容を推測させる」機能があることが明らかとなった。

4.3 -지(요) の文脈的意味

本節では叙述文で使用される-지(요) について953例を基に「情報のなわ張り理論」を用いて、-지(요) の使用をどの程度説明できるかを分析した。

表2. 叙述形 '-지(요)' と終助詞「ね」の使用状況

型	状況	叙述形 -지(요)	「ね」
A	$1=H \geq S > n$	直接形 -지(요), (-어(요))	直接ね形
B	$1=S > H < n$	直接形 -지(요), (-어(요))	直接形
C	$1=H > S < n$	—	間接ね形
D	$n > S \geq H$	間接形 -지(요) / (-어(요))	間接形

表2を見ると、聞き手が完全に情報を知っている場合 ($1=H$) に終助詞「ね」が使用されるのに対して、-지(요) にはそのような規則性が見られず、-지(요) は話し手にとってなわ張りに属さない情報、聞き手にとってなわ張りに属する情報の場合には使用されないことが明らかとなった。さらに、情報が話し手、聞き手にとってなわ張り内に属するA、話し手にとってなわ張り内に、聞き手にとってなわ張り外に属するB、そして話し手、聞き手にとってなわ張り外に属するDでは-지(요) が使用可能であることが分かった。しかしB, Dでは-지(요) が使用される場合と-어(요) が使用される場合があり、その違いが明らかにならなかった。B, Dに共通しているのは聞き手の情報がなわ張りの外に属しているという点である。神尾・高見(1998)では、聞き手のなわ張りに属さないことを示す $H < n$ には $n=0$ も想定されるため、聞き手が全く情報を知らない場合もあり得ることを指摘している。しかし、情報のなわ張り理論では聞き手が多少でも情報を知っているか、あるいは全く知らないかという区別が終助詞「ね」の考察に直接関係していない。一方、-지(요) は話し手が発話しようとしている情報を聞き手が知っているか知らないかということ、つまり情報の有無が関係しており、一般的に聞き手が全く知らない情報には使用できないことが明らかとなった。また、聞き手が知らないと思われる情報を伝える場合であっても、その内容を当然聞き手が理解するであろう、納得するであろうと話し手が想定する場合には積極的に使用されるという語用論的な特徴を有することが明らかとなった。

5. 階層的記憶モデルによる終結語尾の説明

本章では小野・中川(1997)の階層的記憶モデルを修正し、日本語の終助詞「よ」、「ね」と韓国語の終結語尾-네(요)、-거든(요)、-지(요) について対照した。

まず、小野・中川のモデルでは、終助詞同士の接続可能性を説明するために日本語の文末は四つのモダリティ(「評価種類」、「参照」、「評価成否」、「最終処理」)で構成されていると提案されてい

た。これを韓国語の文末構造に当てはめてみると、終結語尾同士の接続が全く不可能であるため「評価成否」は表されない。

次に、小野・中川のモデルの問題点をいくつか指摘した。話し手が発話までの間に行う処理として、発話しようとする情報が「確信」であるか「信念」であるかという処理以外に、小野・中川のモデルに欠けていた「聞き手の記憶を判断する作業」として「推測作業」を設けた。推測作業とは話し手が発話しようとする情報を聞き手がどのように記憶しているか、またどのように記憶（情報）を処理することを望んでいるかというものである。これにより、韓国語の終結語尾-네(요)以外の形態はすべて、この「推測作業」を行っていることが確認でき、何を推測しているかについては形態ごとに異なる結果が得られた。

表3. 推測作業から見た終助詞「よ」、「ね」と終結語尾 '-네(요)'、'-거든(요)'、'-지(요)' の相違

	推 測 作 業
「よ」	発話前：聞き手に情報無 発話後：情報を確信として記憶する
	発話前：確信として聞き手が記憶していない 発話後：情報を確信として記憶する
「ね」	発話前：情報は確信である 発話後： ——
-네(요)	発話前： —— 発話後： ——
-거든(요)	発話前：聞き手に情報無 発話後：確信・信念については言及しない
-지(요)	発話前：確信として聞き手が記憶していない 発話後：情報を確信として記憶する
	発話前：発話に関連する情報が長期記憶にあると想定 発話後：長期記憶にある情報と関連づけて確信として記憶する

表3を見ると、「よ」と '-지(요)' には同じ推測作業が見られる。しかし、4章で考察してきたように-지(요)は「聞き手に全く情報がないと思われる場合には使用できない」ことから、この二つの形態が全く同じ機能として使用されるものではないことが確認された。また、「ね」は発話後に話し手が聞き手の記憶を想定しないことが確認され、-네(요)は推測作業が必ずしも必要ないことが確認された。これは平・堀江(1999)において「各形態が伴った発話が持続されにくい」ということと関係がある。つまり、「ね」を使用した発話は発話時前の聞き手の記憶に関心があり、

-네(요)を使用した発話は発話前、発話後に関わらず聞き手の記憶に関心を寄せない傾向がある。両形態に共通していることは、発話後の聞き手の記憶に関心がないことであり、そのため会話が持続しにくいという結果が見出されると考えられる。

両言語に類似した機能を持つ形態を対照する際、様々な分析方法があると考えられる。今回は「推測作業」という文を処理する過程を通して、聞き手の記憶（情報）の有無のみならず、その形態を使用することによって聞き手がどのように情報を処理することを話し手が望んでいるかという観点をも含んだ考察を行った。それによって、話し手の心理的態度を表すとされる両言語の形態について、何が異なるのかという一つの基準を立てることができたと考える。

6. おわりに

本研究では、韓国語の終結語尾の記述的な分析を基盤として、話し手の心理的態度を表す韓国語と日本語の形態の一部を対照してきた。本研究で取り挙げた形態はごく一部に過ぎず、また、文末形態だけでなく話し手の心理的態度を表す言語手段は数多く存在する。今後は-네(요)、-거든(요)、-지(요)以外の終結語尾の分析を進めるとともに、話し手の心理的態度を表す形態について類型論や認知言語学的な観点からの考察を試みたい。

参考文献

- 小野晋・中川裕志（1997）「階層的記憶モデルによる終助詞「よ」「ね」「な」「ぜ」「ぞ」の意味論」『認知科学』Vol.4, No.2, pp.39-57.
- 神尾昭雄・高見健一（1998）『談話と情報構造』中右実（編）研究社出版.
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編（1996）『言語学大辞典』第6巻 術語編 pp.1266-1268. 三省堂.
- 熊谷智子（2003）「シナリオのある会話—ドラマの日本語の特徴—」『日本語学』Vol.22, pp.6-14.
- 平香織・堀江薫（1999）「韓国語の接辞-neyと終助詞「ね」のムード機能に関する一考察」『第118回大会予稿集』. pp.147-152. 日本言語学会
- 野間秀樹（1988）「<馬畏陥>の研究—現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって」『朝鮮学報』第129輯、pp.1-73. 朝鮮学会.
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
- 水原明人（1999）「作る談話・脚本製作の現場」『日本語学』Vol.18, pp.28-39.
- 宮崎和人（2000）「ムードとモダリティ」『日本語学』Vol.19, pp.50-61.
- 高永根（1986）「叙法과 樣態의 相關關係」『国語学新研究』塔出版社.
- 高永根（1991）「叙法과 樣態의 相關關係」『国語学講座 1 文法 I』pp.279-297. 太学社.
- 徐正洙（1996）「서법」 수정증보판 『국어문법』 한양대학교 출판부.
- 李智涼（1990）「叙法」『国語研究 어디까지 왔나』pp.358-367. 東亜出版社.
- 張京姬（1998）「서법과 양태」『문법 연구와 자료』(이익섭 선생 회갑 기념 논총) 태학사.
- 한 길（1991）『국어 종결어미 연구』강원대 출판부.

- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar. Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lyons, John. (1977) *Semantics*. Vol.2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F.R. (1986) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and Modality* (Second edition). Cambridge: Cambridge University Press.

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語の文末に生起する終助詞（例：「よ」「ね」）と機能的に類似性を有する韓国語の文末接辞の、会話を進行する上での機能（「談話機能」）を実証的に解明することを目的としている。韓国語学の分野では、従来、母語話者が直感や内省的観察に基づいて文末接辞の談話機能を分析してきたが、自然な会話の中で実際に文末接辞がどのように用いられているかを実証的に調査した研究は少なかった。

本論文は、電子化された韓国の TV ドラマのシナリオの会話を大量に収集、コーパスを作成し、登場人物の会話中で用いられた文末接辞の談話機能を前後の文脈の詳細な分析を通じて明らかにしようとした点で、従来の韓国語学の分野の多くの研究とは一線を画する新規性を有している。

話し手が、発話内容に関して、あるいは聞き手に対して、表明する主観的な態度（「モダリティ」）をコード化する文法手段として、ヨーロッパ言語では法助動詞や述語の屈折が存在するが、アジア言語においては、文末に生起する不変化詞（particle）が話者の主観的な態度を表明する文法的手段として重要な役割を果たしている。本論文は、従来の韓国語学の先行研究とは異なり、モダリティを表現する文法手段の間言語的バリエーションに十分注意を払い、韓国語の文末接辞の談話機能に関する従来の研究を踏まえながら、実際の使用例に基づいて、従来の研究で十分解明されていなかった文脈機能を多く提案している点は、韓国語学および一般言語学の分野へのオリジナルな貢献として高く評価できる。韓国語の文末接辞の詳細な分析は、第4章「各形態の文脈的意味」という、本論文の中心をなす章で提示されている。

また、本論文は、単なる個々の文末接辞の機能の記述に留まらず、第5章「階層的記憶モデルによる終結語尾の説明」において、日本語の終助詞体系の機能の解明に用いられた認知的なモデルに修正を加えた上で、韓国語の文末接辞に応用して、第4章で詳細に分析を行った文末接辞の文脈機能に、記憶という観点から説明を加え、各文末接辞の生起上の制限の説明にかなりの程度成功している。これは、従来の韓国詩学の分野の分析・知見を超えた意欲的な試みで、著者の研究者としての将来性を伺わせるものである。

このように本論文は、使用したデータの新規性、分析の方法論の着実さ、さらにデータから帰納的に得られた観察をさらに統一的な観点から説明しようとする着想の独創性の点で著者の研究者としての資質の高さを証明するものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。